

二〇〇六年 山口県大会上演作品

作品名 「春夏秋冬」

作者名 渚太陽

連絡先 宇部鴻城高等学校

作品紹介

妻に先立たれて、男手一つで家族を育てている一郎に妻の霊がのりうつり、家族の問題を解決していく

上演可能人数 5人（生徒や保護者の数を工夫すれば可）

CAST

春子（一郎）

夏子

秋子

冬彦

先生

生徒たち

保護者

#相談室

先生 こちらです。

担任にうながされて、席に着く秋子と父

先生 どうぞお座り下さい。

一郎 あ、はい。……ほら、秋子。

秋子 ……。

父、秋子を座らせる。

先生 お父さん。もうすでにおわかりかと思いますが、秋子さんの

の欠席日数があまりにも多く、学校側としても対応に困っているところですよ。もしこのまま、彰子さんの欠席が続くようでしたら……

一郎 退学ですか？

先生 今すぐというわけではありません。このまま欠席が続くと、まず進級出来ません。現実的に、進級が出来ないと、学校を去る者が多いんですよ。でも、本人に学校を続けたい気持ちがあるならば、私たちもいろいろとサポートしていく気持ちがあります。

一郎 学校は、続けたいと本人も思っていると思います。そうだ

よな秋子。

秋子 ……。

先生 何か、言ったらどうだ？

秋子 ……。

先生 そんなに学校が嫌いか？

秋子 ……。

先生 何も言わないと、わからないじゃないか。

秋子 ……。

先生 うーん。お父さん、ご家庭ではどんな様子ですか？

一郎 あのー、家では……そうですね。部屋に籠もりつきりという

わけではないです。学校には行こうと仕度はしているみたいですが、多分、昨年の暮れに母親を亡くして、そのショックからまだ、立ち直ってないんだと思います。ですから、その気持ちの整理がつけば、学校にもまた登校できると思います。

先生 その点については、秋子さんを気遣うようにと暮らす全体に言っています。ですから、私たちとしては、とにかく学校に来てもらわないことにはなかなか前に進まないと考えています。

一郎 わかっています。なあ、秋子。もうしばらくしたら学校に

戻るよな？

秋子 ……。

先生 秋子さん？こんなにもお父さんが心配してくれているんだ。

お母さんのことは、わかるけど、お父さんのためにも頑張っ

てみないか？

秋子 ……。

一郎 秋子……

先生 とにかく、もうしばらく考えてみてください。まあ、学校

だけがすべてじゃないですから。

一郎 ……わかりました。もう一度、親子で話し合ってみます。

どうもすみませんでした。

先生 いえ、まあ考えがまとまったら、またご連絡下さい。

一郎 どうも、ご迷惑をおかけします。ほら、秋子も（頭を下げるようにうなぐす）

秋子 ……。（洪々頭を下げる）

先生 では、失礼します。

#食卓（朝）

音楽『春夏秋冬』

時計の音

台所の奥から一郎の声

一郎 どわっ。こんなもんかな……うわー、や、やばい（鍋を

落とす音）あーあ。

夏子、起きてくる

夏子 おはよう。？（台所の方に移動）何やってんのお父さん。

一郎 いや、あの、その。みんなの弁当でも作ろうかなあって。

夏子 ちよっと、貸して、ほら。

しばらくして、二人が台所から朝食を運んでくる。

見るからに失敗作

夏子 もう、お母さんがいなくなってから、食事を作るのは私の

役目なんだから。

一郎 すまん。お前、昨日も遅かったから、たまには、父さんが

弁当でも作ろうかなって思ってた。

夏子 気持ちは嬉しいけど、慣れないことはやめてよね。後かた

づけの方が大変なんだから。

一郎 すまん。

夏子 でも、何とか食べられそうね。（一口食べてみる）

一郎 そ、そうだろ、見た目は悪いかもしれないけど、味の方は

自信があるんだ。

夏子 やっぱり、まずい（台所に捨てに行く）

一郎 すまん、夏子。

夏子 どうやったたら、あんな味になるわけ？

一郎 いや、たしか、母さんは卵焼きを作るときにいつも、マヨ

ネーズを入れてたような気がしてさ。

夏子 それでか。

一郎 何が？

夏子 多分、お父さんが入れたのはカラシよ。

一郎 カラシ！？

夏子 私、朝から罰ゲームを味わった気分だわ。

一郎 そうか、何だか黄色い感じだったんだよな。すまん。

夏子 もういいよ、今日は。お父さん、お昼はどこかで食べてね。

お弁当の材料全部駄目にしちゃったんだから。私も何か、コンビニで買うから。

一郎 すまん。

夏子 はい。(手を出す)

一郎 何だ？

夏子 私のお昼代。材料をあんなに使っちゃったんだから。

一郎 お前、そういうところはちやっかりしてるな。

夏子 当たり前よ。

一郎 (お金を渡しながら) 死んだ母さんそっくりだ。

夏子 ごめんね。今月、ちよっとピンチなんだ。

一郎 仕事の方は、大変なのか？

夏子 ……う、うん。残業が多くてね。あつ、そうだ。今日も遅くなるんだ。晩飯、作れそうもないから、何か出前でも取ってよ。

一郎 ああ、わかった。あんまり、無理するなよ。

夏子 わかってるよ。ところで、どうだった？秋子の学校の先生。

一郎 あ、うん。人の良さそうな先生だったよ。

夏子 それで、何だつて。

一郎 欠席日数が多くて、進級できなくなる可能性があるそうさ。

夏子 そうよね。それで、秋子は？

一郎 昨日から、部屋にこもってる。

夏子 また、始まっちゃたのね。

一郎 ああなると2、3日は出てこないからな。

夏子 一回、ガツンと秋子に言ったら。

一郎 どうして。

夏子 何かあるのか言えないって事は、甘えてるだけじゃないの。

一郎 そんなもんな。

夏子 私もそれなりには聞いてみるけど。

一郎 やっぱ、母さんのことが尾を引いてるんだろうな。

夏子 あの年頃はいろいろ難しい時だし、秋子は、本当にお母さんっ子だったしね。

冬彦、起きてくる

冬彦 おはよう。あれ、秋子姉ちゃんは？

夏子 いつもの調子よ。

冬彦 だらうと思った。昨日、遅くまで起きてるみたいだったし。

一郎 そうなのか？

冬彦 あれ、きつと学校で何かあるんだよ。お姉ちゃんね、何か

悩みがあるといつもあの曲聞いているもん。

一郎 あのと曲って？

冬彦 春夏秋冬。

一郎 春夏秋冬？

夏子 お母さんが、好きだった曲よ。

一郎 そうなのか……（春子の写真を眺める）

夏子 さあ、冬彦。早く食べないと、学校遅れちゃうわよ。

冬彦 はーい。

夏子 お父さんもよ。

一郎 あ、ううん。

パンをかじる冬彦

コーヒーを飲む一郎

一郎 なあ、冬彦。学校はどうだ？

冬彦 どうって？

一郎 楽しいか？

冬彦 うん、楽しくやってる。今は、来週あるクラス対抗のサツ

カー大会の練習でいろいろ忙しくてね。

一郎 そうか。ならいいんだ。

冬彦 何だよ。ならいいって。

一郎 いや、やっぱりお母さんがいなくなって寂しいんじゃない

かなあってさ。

冬彦 だってしょうがないじゃん。いつまでもメソメソしてるわけにはいかないし。僕には、お父さんやお姉ちゃんがいるもん。クラスの俊弥君は、お父さんがいないけどすごく頑張ってるんだ。だから僕もね。

一郎 お前、大人だな。秋子姉ちゃんにお前ぐらいの精神力があればなー。

冬彦 まあ、そういう点では僕はお母さんに似ていたんじゃないかな。秋子姉ちゃんはどう見たって、お父さん似だね。

一郎 どういう事だ。

冬彦 周りに気を遣いすぎて、かえって自分の首を絞めてるって

いうか……

一郎 何だか父さん、お前のことがまぶしく見えてきたよ。

冬彦 だから、父さんもそんなに秋子姉ちゃんに気を遣わずに、ガツンと言ってやればいいんだよ。「学校に行け！」って。

一郎 夏子みたいな事言うんだな、お前は。秋子姉ちゃんは、まだ母さんの事がうまく整理つかないんだよ。

冬彦 そうかなー。絶対別の理由の気がするけど。

夏子 ほら、早く食べないと遅刻するわよ。（掛け時計を見る）やだ、これ時計止まってるじゃない。

冬彦 あ、本当だ。

夏子 今何時、お父さん？

一郎 （腕時計を見て） 8時。

夏子 あー、もうそんな時間なの、行かないや。冬彦早くして。

冬彦 ちょっと、待ってよ。あと一口。

夏子 あ、お父さん戸締まりよろしくね。それから、晩ご飯は出

前頼んでね。わかった。

一郎 あ、うん。気をつけてな。

冬彦 待ってよお姉ちゃん。

一郎、二人を見送り秋子の部屋の前に行く。
扉越しに秋子に話しかける。

一郎 秋子、起きてるか？

秋子 ……。

一郎 今日はどうする？学校行かないのか？

秋子 ……。

一郎 先生には父さんから連絡しておくからな。朝ご飯ちゃんと
食べろよ。あと戸締まりもよろしく。父さん今日はなるべく
早く帰るから

秋子 ……。

一郎 秋子。今度、「春夏秋冬」父さんにも聞かせてくれよな……
行って来ます。

#食卓(夕)

テーブルには不満そうな様子の冬彦

冬彦 まだー、父さん。

一郎 待ってる、冬彦。父さん特製のうまいものをごちそうして
やるからな。

冬彦 おなか空いて死にそうだよ。夏子姉ちゃんの言うとおりに、
出前取った方がいいんじゃないの？…ねえー。

一郎 お待たせー父さん特製の塩ラーメンスペシャルだ！

冬彦 塩ラーメン？何でスープが白いの？

一郎 フフフフ、牛乳を入れてみた。

冬彦 ……：やっぱり、出前取る。(電話をかけようとする)

一郎 待て待て、それは食べてみてからにして欲しいな。冬彦君。

冬彦 えー、味が想像つかないんですけど……。(渋々食べる)

一郎 どうだ？

冬彦 何だ、意外とうまいじゃん。

一郎 そうだろう、そうだろう。これは、父さんが学生時代から
作ってたからな。

冬彦 ふーん。結構食べられる。

一郎 ……：なあ、朝の話なだけだな。

冬彦 何？

一郎 秋子の事だよ。

冬彦 秋子姉ちゃん？

一郎 ほら、「お姉ちゃんがああ曲を聞くときはきつと、何か悩ん
でるんだって……」

冬彦 ああー、その事。

一郎 お前、どう思う？何で秋子が、学校を休みがちになったと思う？やっぱりお母さんの事が整理つかないのかな？

冬彦 それはないよ。だって、去年の暮れにお母さんが亡くなつて僕たち、一杯……それこそ一生分泣いたけど、秋子姉ちゃんは、「これからは、お父さんを支えながらみんなで頑張ろう」って言ってたしね。

一郎 秋子が……。

冬彦 言ったじゃないか。秋子姉ちゃんは誰よりも周りに気を遣うお父さん似だって。

一郎 じゃあ、何が原因なんだ。学校に行かない理由は？

冬彦 いじめじゃない？

一郎 いじめ？

冬彦 お父さんだって、うすうす気がついてたんじゃないの。

一郎 ……でも、秋子そんな事は一言も言わないし。

冬彦 絶対そうだと思うけどな。あの時期の高校生は結構あるみたいだよ。いじめが。

一郎 やっぱり、父さんお前がまぶしく見えてきたよ。

冬彦 まあ、そのうち立ち直るんじゃない？いじめなんて、どこかの社会にだってあるんだからさ。

一郎 ……お前まさか？

冬彦 心配しないでよ。僕は大丈夫。適当にやってるから。

一郎 そうか。

冬彦 あー、宿題やんなきゃ、忘れてた。ごちそうさま。

一郎 悪かったな、心配かけて。

冬彦 いいよいいよ。秋子姉ちゃんの気持ちは、お父さんが一番良くわかつてると思うよ。

冬彦 去る。

一郎、秋子の部屋の前

秋子に話しかける。

一郎 秋子……。起きてるか？……お前、何か悩んでるか？……その、あの……まあ、いいや。人生いろいろあるもんな。……ラーメンここに置いておくよ。じゃあ……。

暗転

#食卓(夜中)

一郎、一人で酒を飲んでる。

夏子が帰ってくる

一郎 お帰り。

夏子 ごめん、起きてたの。ただいま。

一郎 遅かったな。(酒の匂いを感じて) 何だ、飲んできたのか？

夏子 う、うん。仕事が終わって、職場の人たちとね。

一郎 そうか、あんまり無理するなよ。

夏子 わかってるよ。(何か言いたい様子で) あのね、お父さん。

一郎 冬彦がさ……。

夏子 えっ、何？

一郎 秋子は学校でいじめられてるんじゃないかって、言うんだ。

夏子 ……そう。

一郎 お前はどう思う？

夏子 そうなのかもね。冬彦の勘は当たるから。秋子に聞いてみ
たの？

一郎 いや、まだ……。

夏子 お父さんから、ちゃんと聞いてみた方がいいよ。

一郎 そうだな。そうしてみる。

夏子 私も秋子に聞いてみるよ。じゃあ、明日も早いから先に寝
るね。

一郎 ああ、お休み。……夏子。

夏子 何？

一郎 さつき、何か言おうとしてなかったか？

夏子 ああ、……またにするよ。洗い物出しといてね。明日、
洗うから。

一郎 うん、ありがとう。

夏子 お休みなさい。

一郎 お休み。

夏子去る。

一郎ひとりで飲み続ける。

春子の写真を持ってきて、語りかける。

一郎 春子。お前なんで死んじまったんだ。お前ならこういう時、
どうするんだろうな……

飲み続ける一郎

いつしか、寝入ってしまう。
止まっていた時計が自然とグルグル動き出す。

暗闇の中から、春子が登場

寝ている一郎に話しかける。

春子 お父さん。お父さん。……こんなに飲んで酔いつぶれて、

問題先送りにしても、物事は解決しないのよ。病室のベット
で、「後のことは俺に任せておけ」って言ってたじゃない。今
の状態じゃあ全然任せられないわね。秋子のことともそうだ
けど、夏子にばかり頼って。あれじゃあ、夏子も大変じゃ
ない。もう少し家事も手伝ってあげたっていいんじゃない。
それに、冬彦に相談してどうするのよ。親が一番甘えたい時
期なのに。お父さんが甘えちゃあ、冬彦も、甘えられないで
しょ。というわけで、お父さん。しばらくお父さんの身体を

お借りします。和泉家のピンチはやつぱり、私が救わないとね。では…………。

寝ていた一郎、目を覚ます。

一郎 ……う、な、何だ。何だか変な夢を見たな…………春子が
夢枕に立ったような…………

※これから先の春子の台詞は、一郎の一人二役の台詞とする。

春子 お父さん。

一郎 は、はい？…………って何だ俺、一人で何言ってるんだろう？

酒の飲み過ぎかな？

春子 お父さんってば。

一郎 は、はい？えっ！？な、何？…………（動揺した様子）何だ

か口が勝手に…………

春子 お父さん聞いているの？

一郎 ひやつ？！（口を押さえる）…………春子か？

春子 そうよ、お父さん久しぶり。

一郎 ぎよえ？！（口を押さえる）…………俺どうかしちゃったの

か？ああ手が勝手に。

春子 いちいち口を押さえるのは、やめてくれる。春子ですよ。

ちよっとばかりお父さんの身体に乗り移らせてもらいました。

一郎 そんな、そんな事って…………

春子 お父さんが、いろいろ秋子のことと悩んでるみたいだったから、助けてあげようと思ってね。

一郎 本当に春子なのか…………（グスツ）

春子 そうよ。やーねお父さん、泣いてるの？

一郎 だって、会いたかったよ…………春子ーっ！（と言って自分
自身に抱きつく）

春子 やだちよっと、やめてよ。

一郎 だって…………いいじゃないか…………会いたかったんだぞ
（と言いながら、自分自身を触る）

そこへ、寝ぼけた冬彦が現れる

冬彦 むにやむにや…………お父さん…………おしっこ。

自分の身体を触ってる一郎を見る

冬彦 お！おお姉ーちやーん！お父さんが…………お父さんが！

一郎 あっ！おい！冬彦！

冬彦、走り去る

一郎 こら待て。冬彦！これは、あの、その…………

追いかける一郎

食卓に戻った時には、春子が一郎の後ろを歩いてくる。

※この後は春子と一郎はそれぞれの役がこなす

一郎 あーあ……何だか変な誤解をされたような気がするな。

春子 大丈夫よ。あの子夜中にあったこと、ほとんど憶えてないから。

一郎 (一郎、春子が後ろにいることには気づかず) そういえば、そうだったな。あいつ、昔からいいタイミングで俺たちの寝室に入ってきて「おしっこ」って、言ってたしな。これからって時に限ってな。グフツ☆◎ (いやらしい目つきで) なあ、春子、俺、俺……寂しかったよー! (と言って自分の身体に抱きつく)

春子 何やってるの?

一郎 何って、その、こう、二人の愛をだな…… (振り向く)

春子 ?

一郎 うわっ! 何だ春子。俺の身体にいたんじゃないのか?

春子 少しなら、こうして現世に現れることが出来るのよ。

一郎 そうか、びっくりした。あ……ってことは、もう一度、改めまして……コホン。

春子に抱きつくとうする一郎

しかし、抱きつけない。

一郎 あれ、上手く触れないぞ。

春子 当たり前よ。幽霊なんだから。

一郎 そうか……残念。

春子 そんなことよりね、しばらくお父さんの身体をお借りしますよ。和泉家のピンチをお母さんパワーで乗り切るしかないからね。

一郎 それは、わかったけど、俺はどうなるんだ?

春子 お父さんも、しばらくは、極楽温泉にでも浸かっていらっしやったら、いいじゃない。

一郎 極楽温泉? 何だそれは?

春子 あの世の温泉よ。なかなかいい所よ。

一郎 あの世? それじゃあ、俺は死んじゃうのか?

春子 しばらくの間ですから。問題を解決すれば、きちんとお体をお返しします。とにかく後のことは私に任せて、ノンビリして来て下さいよ。

一郎 そ、そうか。何だかよくわからないけど……、春子、お前に任せるよ。

春子 では、早速お体をお借りいたします。

一郎 それで、どうやって俺の身体に移るんだ?

春子 そんなの決まってるじゃないですか。大人の男と女ですよ……フフ

一郎 いや、ちよつと……

春子 では、行きますよ。

一郎 いやあの……まさか……

春子 返事は。

一郎 はい。でも……お、お前……そんな大胆な合体は、いや……あの、あうーん。

暗転

#食卓(朝)

朝の音楽

小鳥のさえずり

台所の音

※ここからの春子の台詞は一郎役のお父さんが言う。

へアバンドか何かをつけて少し、女らしい格好をする。

春子 さあ、みんな起きて、起きて。すてきな朝の時間ですよ。

夏子起きてくる。

夏子 何よ、お父さん朝っぱらから大きな声を出して。あれ?何

この匂い?いい匂い。

冬彦起きてくる。

夏子 あ、おはよう冬彦。

夏子、台所に行く。

冬彦 ふわーあ。おはよう。何だか朝からテンション高いな……

春子、朝食を運んでくる。

春子 ほらほら、夏子も早く手伝って。

夏子 ちよつと、お父さん。一体どうしたの?

冬彦 うわーすごい。普通の朝食だ。これ、お父さんが作ったの?

夏子 何なの?それに、お父さんその格好……?

春子 冬彦、朝起きたらまずトイレに行って、顔を洗うのよ。忘

れたの。ほら、夏子もお茶碗にご飯をよそって……

忙しそうに台所と食卓を行き来する春子。

夏子と冬彦互いに顔を見つめ合い。

冬彦 何だか、お父さん変じゃない?

夏子 おかしいわよ。お父さんじゃないみたい。料理も完璧だ

し……

春子 ごちやごちやいってないで、早くしなさい。あ、それと夏子。お弁当作っておいだから、持って行きなさいね。

夏子 ……？

冬彦 ……。

夏子 ちよつと、お父さん！変なしゃべり方やめてよ。気持ち悪いじゃない。

冬彦 お父さん。頭おかしくなっちゃったのか……？

春子 あら、そうだったわね。姿形はお父さんのままだったわ。

ごめん、ごめん。えー……こほん。ただいまい、お母さんですよ。

夏子 はあ？

冬彦 えーっ？

夏子 お父さん、朝から冗談やめてよ。お母さんの真似なんかして……

冬彦、あわてて秋子を呼びに行く。

春子 真似なんかじゃないわよ。ほら、お父さんにこんな朝食やお弁当を準備出来る？

夏子 それはそうだけど……そんな、だって……

冬彦、秋子を引っ張って食卓に来る。

冬彦 秋子姉ちゃん。ほら、お父さんが……

秋子 ……。

夏子 もう、一体どういう事？

春子 あら、秋子おはよう。

秋子 ……。

春子 ちよつと、親に「おはよう」も言えないってのは、どういう事よ。(強い口調で) 秋子！

秋子 (ちよと、困った様子で) お、おはよう。

冬彦 お父さん？何だかお母さんみたいだ……夏子姉ちゃん。

夏子 お父さん。どういう事か説明してよ。

春子 だから、お父さんじゃなくて。お母さんなの？

夏子 ふざけないでよ。

春子 あの世から現世に出てきて、しばらくお父さんの身体を借りて、ここにいることになったのよ。

冬彦 えー！

夏子 えー！

秋子 ！？

夏子 うそでしょ……そんな話信じられない。

冬彦 お母さんが、お父さんに乗り移ってる？……えー！

春子 というわけで、よろしくね。

夏子 よろしくね……

春子 ほら、急がなきゃ、遅れるわよ。秋子も今日は学校に行く

のよ。わかった？

子ども達、なにやらがやがやと言いつけている。

壁時計を見る、春子

春子 あら、時計止まってるじゃない。(腕時計を見る春子)

秋子 ? (腕時計を見る春子の様子に異変を感じる) 冬彦……

ちよつと……

秋子、冬彦や夏子になにやら言っている。

春子、壁時計をはずす。

冬彦 お父さん？今何時？

春子 ん？だから、お母さんだってば。

冬彦 もう一回、腕時計を見てくれる……

春子 何よ、変な子ね。……(腕時計を見る) 七時三十三分よ。

ほら、いそがなきや。

冬彦 本当だ。お姉ちゃん、本当にお母さんかも……？

夏子 何で？

冬彦 だって、あの時計の見方はお母さんだよ。ほら、こうして

さ……(時計の見方を真似する) お父さんだったら、あんな風には見ないし……本当にお母さんが……

夏子 でも、そんなのお父さんが、ふざけて真似してるかもしれ

ないじゃない……

冬彦 そうじゃないと、この状況説明つかないよ。お父さんこんな料理上手くないし……

夏子 それは、そうだけど……秋子、あんたどう思う？

秋子 (困った様子)

春子 とにかく、信じられないならそれでもいいけど、早いとこ、

朝ご飯食べないと遅刻しちゃうよ。

夏子 あー、いけない、今日は早朝会議の日だった。とにかく、この話は帰ってからするからね……

夏子、あわてて仕度に行く。

春子 ほら、冬彦も急いで。

冬彦 あ、あの……うん。そうだね。

冬彦も仕度をしに去る。

春子 秋子あんたもよ。

秋子 ……

春子 返事もしないのかい？

秋子 行きたくない……

春子 お父さんだったら、「そうか、具合でも悪いのか」って言う

ところだろうけど、お母さんは許さないよ。とにかく着替え

てきなさい。

秋子 ……何だよ、お母さんの真似なんかして……

春子 (強い口調で) いいから、着替えて学校に行くの!

秋子 ……

春子 ほら!

秋子、部屋に渋々行く。

暗転

音楽

#食卓(夕方)

冬彦 ただいまー……うわーいい匂い。

春子 お帰り。

冬彦 ハンバーグだ!上手そうー

春子 早く手を洗っておいで、おなか空いたでしょ。

冬彦 はーい。

春子 いい返事だね。

冬彦 ……本当にお母さんみたいだね。

春子 だから、本当にお母さんだって言ってるでしょ。

冬彦 へへへ……

冬彦、手を洗いに行く

夏子、秋子の手を引っ張って入ってくる。

夏子 ほら、早くしなさい。

秋子 放せよ。

夏子 いいから、ほら。

夏子、秋子帰ってくる。

春子 お帰り。どうしたの?あら、夏子早かったわね。

夏子 お父さん!……じゃなかった、お母さん?あーもう、面

倒くさい。

春子 だから、お母さんだって。

夏子 じゃあ、もうお母さんでいいや。ねえ、聞いてよ。秋子つ

たら、学校を早退して、ゲームセンターを彷徨ってたんだよ。

私が今日は早上がりだったから、見つけたんだけど、女の子

が一人であんな所……ねえ、秋子、どうして勝手に早退な

んかしたの?

秋子 別に……お姉ちゃんには関係ないだろ!

春子 学校で何かあったのかい?

秋子 ……

春子 何にも言わないところを見ると、凶星なんだね、秋子。

秋子 うるせーよ。お父さんだか、お母さんだか、わからない人

にいちいち言われたくないんだよ。

春子 それが、親に向かって言う、口の利き方なの！

秋子 ……。

春子 学校で何かがあるか知らないけど、理由も何も言えないなら、ちゃんと学校に行きなさい！

秋子 ……行きたくない。

夏子 どうして秋子？ただでさえ、お母さんが亡くなってから近所の人も優しく気遣ってくれてるのに、秋子がこんな風じゃ、お父さんだって……

秋子 何だよ、みんなして私の心配ばかりしてさ。自分たちは、

どうなんだよ。私にばかり哀れむようにするのはやめてよ。

夏子 あんたが、きちんとしてれば誰もそんな風には……

秋子、部屋に行く。

夏子 秋子。

春子 ほっときなさい。夏子。

冬彦、戻ってくる。

冬彦 また、やってらー。お姉ちゃんも懲りないね。

夏子 何よ。

冬彦 秋子姉ちゃんだって、いろいろ考えてるんだよ。きつと……このままじゃいけないって。それに、急に目の前

にお母さんが現れたんだから……頭の中心からがつてんじゃない？（夕食を前にして）いただきまーす。

夏子 秋子は現実逃避してるだけよ。もっと、現実を受け止めたくちや。

春子 あんたは、ちゃんと現実を受け止めてるの？

夏子 そ、それは……

冬彦 秋子姉ちゃんも、お母さんがいなくなつてから、家のことやなんやらで、結構頑張りすぎてた所あるからね。現実を受け止めてたっていうより、先送りしてきたんだろ？

春子 そうなのかい？

夏子 何よ、冬彦ばかりいい子ぶっちゃつて。

冬彦 別に、そうじゃないけどさ。現にお父さんに、お母さんが乗り移つてるってことは受け入れたの？

夏子 それは……その……

冬彦、春子が夏子をじーつと見る

夏子 わかつたわよ。お父さん……じゃなかった。お母さんって認めればいいんですよ。

冬彦 お、なかなか学習能力があるじゃないか？

夏子 こら、さつきから聞いてると、あんた、お姉ちゃんのこと馬鹿にしてない？

冬彦 うわーこわい。ごちそうさま。

冬彦、部屋に行こうとする。

追いかける夏子。

食卓の周りをぐるぐる回る。

夏子 待ちなさい、冬彦。

春子 自分で食べたものぐらい、自分で片づけなさい。

冬彦 お姉ちゃんやっついておいて

夏子 こら！冬彦！

春子 こら！冬彦！

冬彦、去る。

すぐ戻ってきて

冬彦 お姉ちゃん、怒鳴り散らすところは、本当お母さんそつく

りなんだから！

冬彦、去る。

夏子 冬彦！

春子 ……（夏子と目が合い）ふふふ。

夏子 何よ、お母さんまで…

春子 だって、冬彦の言うとおりに、変なところばかりお母さん

に似てるのかなって。

夏子 もう……ふふふ。

春子 あんたも、晩ご飯まだなんですよ。

夏子 あ、うん。手伝うよ。

夏子、春子の手伝いをしながら

夏子 ねえ、会社はどうしたの？

春子 え？ああお父さんの？折角さ、お父さんの身体借りてるの

に会社に行くのもどうかかって思っ、有休を取ったのよ。

夏子 そうなんだ。

春子 家のことも出来るだけしておこうと思っ、あ、そうだと

洗濯物たまっ、たよ。

夏子 ごめん。昨日も遅かったから…

春子 いいのよ、夏子にも苦労かけたね。

夏子 そうよ、お母さん。勝手に死んで、勝手に戻っ、てきて。

春子 ごめんなさい。ふふふ。

夏子 ふふふ。

春子 さあ、食べなさい。

夏子 いただきます。……本当、おいしい。お母さんのハンバ

ーグの味だ。

春子 よかった。……ところで、秋子はやっぱり、学校で何か

あるみたいね。

夏子 冬彦の言うとおりで、やつぱりいじめられてるんだと思う。

春子 どうして、そう思うの？

夏子 あの子、今まで学校のことは、何でもお父さんに話してただけど……先月ぐらいいからかな、学校を無断で休むようになったの。その頃から、部屋に籠もったきりになるのが、多くなつて、何も言わなくなっちゃったの。

春子 そう……やつぱり、私が死んだのがいけなかったのかね。

夏子 お母さんが死んだことは、秋子もきちんと受け止めて、なるべく明るく努めているみたいだったけど……そんな時に、きつと学校でいじめがあったから……多分、お父さんやみんなに心配かけたくなかったんじゃないかな。

春子 でも、馬鹿だねー。心配かけないようにしてることが、逆に心配かけてることに気づかないんだねー。親子なんだから、家族なんだからもつと頼つてもいいのに。甘えればいいのにね。

夏子 それでも、お父さんは優しいから、そんな秋子の気持ち、全部わかつて、何も言わないんだ。だから、秋子の好きにすればいいって感じて……

春子 本当に似たもの親子なんだねー。相手の気持ちを考えているもの同士が、お互いつらかったら意味ないのにね。

夏子 本当ね……

春子 それこそ、子どもの気持ちをわかってあげて、守ってあげてるっていう風にすることが、相手を傷つけてるかもしれない

いのに……

夏子 お母さんだったら、どうする？

春子 そんなの、決まってるじゃない。どーんとお互い言いたいこと言つてぶつかればいいんだよ。親子なんだからさ。

夏子 お母さんらしい……お父さんもお母さんみたいにガツンといけばいいのに……難しいね、親子って。

春子 難しくなんかないよ。そんな風に難しく考えるから、いけないんだよ。だいたい、お父さんだって、昔は私に、親の反対を押し切つて強引に体当たりで結婚を申し込んだんだよ。そういう素直で、何でも一生懸命やる所に、お母さんは惚れ込んだんだけどね。

夏子 やだ、お母さん。惚気てるの？

春子 お父さんだって、結構突っ走る所があつてね。結婚して、子どもが出来てからは、それは本当に喜んでね。あんたが生まれる時なんかは、病院の周りを何十周もしてさ、「お百度参り」みたいにね。それで、生まれた瞬間赤ちゃんのあなたの泣き声より大きな声で泣いてたつて。

夏子 へえ、そうなんだ。

春子 病院中のみんながびっくりしてたのよ。恥ずかしかったな。

夏子 あら？お母さんでも、恥ずかしいことがあるんだ。

春子 何よ。でも、子どもが出来てからは、お父さん本当に優しくみんなに接してたのよ。甘やかしすぎの所もあつたね。まあ、その分お母さんが厳しく、強くなつちやたのかな？

夏子 お互いにないとこを補ってるから、夫婦って事ですか？

春子 あら、わかってるじゃない。

夏子 ごちそうさまです。フフフ……ねえ、コーヒー飲む？

春子 うん、いただくわ。

夏子 ……でも、何となくわかるような気がする。お父さん、

お母さんが死んでから特に、みんなに気を遣ってるような気がするから。一人でお母さんの代役を務めるのは、きつと大変なんだよね。

春子 それじゃあ、死んだ私が、一番悪いみたいじゃない。

夏子 そういうこと。フフフ。

春子 一本取られたわね。

夏子 フフフ……

春子 ……ごめんね、夏子。お母さんいなくなってずうっと、

私の代わりに家のことをしてるんですよ。

夏子 もう、慣れたよ。みんなで何とかやってるから、心配しないで、お母さん。

春子 あんたも、気を遣いすぎないでね。

夏子 はい。

春子 (コーヒーを飲みながら)とこで、夏子？

夏子 何？

春子 何か、相談事があるんじゃない？

夏子 どうして？

春子 だって、あんたがコーヒーにミルク入れるときって、大抵

お母さんに相談がある時だからね。

夏子 ……さすが、お母さんって感じね。

春子 お父さんには言いづらいことだったら、今がチャンスよ。

どのくらいお母さんもこの身体を借りていられるかわからないもの。

夏子 実はね……、プロポーズされたの。

春子 職場の人？

夏子 うん……

春子 何て言われたの？

夏子 前から、気になってた人で、つき合っただしてから、半年ぐ

らいかな。この前、いきなり「結婚してください」って……

春子 それで、夏子は好きなの？その人のこと。

夏子 うん……誠実でいい人よ。頼りない部分はあるけど、私のことを本当に大切にしてくれるの。

春子 そう。だったら、話が早いじゃない。お父さんにきちんと報告しなくちゃ。

夏子 でも……今、お父さんは秋子のことです。いろいろ大変そうだし……

春子 それでも、OKするんですよ。お父さんもきつと、わかってくれるよ。難しく考えないで、正直な気持ちをお父さんに話さない。

夏子 ……うん。何だか、お母さんと話していたら、勇気が出てきたわ。

春子 親子なんだから、家族なんだから、遠慮することなんて、

無いんだよ。

夏子 そうね。自分から壁を作ってもしようがないものね。

春子 そういうこと。

冬彦、起きてくる。

春子 あら？

夏子 どうしたの？冬彦。

冬彦 何だか、話し声でしたからさ…

春子 ごめんね。うるさかった？

夏子 じゃあ、お母さん。私、先に休むね。

春子 わかった。お休み。

夏子 冬彦も早く寝るのよ。お休み。

冬彦 お休み。

夏子、去る。

春子 ……学校はどうだい？楽しい？

冬彦 まあね。適当にやってる。

春子 そう。よかった。

何だか落ち着かない様子の冬彦

冬彦 ……あのね、今度サッカーの試合があるんだ。 ……見

に来られるかな？

春子 ごめんね。お母さん、その日までお父さんの身体を借りられるかどうか分かんないんだ。 ……でも、お父さんにちゃんと見に行くように伝えとくね。

冬彦 別に、ちょっと言ってみただけ。お父さんも仕事が忙しいし…

春子 ……

冬彦 じゃあ、もう寝るね。

春子 冬彦、ごめんね。甘えたい盛りに、お母さんがいなくなっちゃって。

冬彦 いいよ別に、謝らなくて。お母さんだって、死にたくて死んだわけじゃないんだからさ。

春子 本当にごめんね。

冬彦 お母さんがいなくてもね、みんな、結構頑張ってるよ。楽しくやってるよ。そりゃあ、お母さんが今でも本当に生きていたら、いいなあって思うこともあるけど…でも、僕ばかり甘えてちゃ、お父さんも大変だしね。

冬彦…

春子 じゃあ、寝るね。お休み。

冬彦 ……待ちなさいウインターマン！

冬彦 えっ？何言ってるの。

春子 何よ、ノリが悪いわね。昔よくやったじゃない。ねえ、折角だから今からやらない？

冬彦 嫌だよ。こんな時間に。それに僕もう小六だよ、恥ずかしいよ。

春子 あれ？逃げる気なのウインターマン。

冬彦 ……もう、しようがないなあ。一回だけだからね。

春子 そうこなくっちゃ。

冬彦 出たな、ゴーストウーマン。お前の好きなようにはさせないぞ！

春子 さあ、かかってらっしゃい。

戦う、春子と冬彦

投げ飛ばされる冬彦

春子 どうしたのお前の力はそんなものなの。

冬彦 負けないぞ。

飛びかかる冬彦

勢い余って倒れ込む二人

春子 ちょっと、まいったまいった。いつの間にこんなに力が強くなったの？

冬彦 ……。

春子 はい、もうおしまいね。……冬彦？

冬彦 どうして？……どうして死んじゃったのさ。

春子 冬彦……

冬彦 お母さん……

抱き合う二人。

冬彦 ずーっとこうしたかった。本当にお母さんの匂いがする。

春子 お母さんもよ。冬彦ともっともっと、こうしてたかった。

ごめんね冬彦。

冬彦 お母さん。

春子 お父さんをよろしくね。

しばらくして、離れる二人。

冬彦 ありがとう。お母さん。

春子 こちらこそ。ありがとうね。

冬彦 知らない人が見たら、男同士で抱き合う変な親子に見えたかな。

春子 そうかもね（笑）

冬彦 じゃあ、寝るね。

春子 お休み、冬彦。

冬彦去る。

春子、しばらくお茶を飲んだりして何か考え事をしている。
お茶を飲み干して、

春子 さあ、あとは秋子だね。

電話が鳴る

春子 もしもし、あっはい和泉です。……あら、秋子の担任の先生。どうも初めまして、じゃなかった。いえいえ、いつもお世話になります。今日はどうもすいません。無断で早退したみたいで、明日は必ず、学校に行かれますので……えっ、明日?……そうなんですか。……わかりました。お伺いいたします。ええでは。

暗転

音楽

場面転換

#学校の教室（保護者参観）

秋子をいじめているようなシーン
教室に入ってくる秋子

教室の後ろには保護者。

生徒、わいわい騒いでいる。
教師、教室に来る。

先生 それでは、授業を始めよう。

その途端、慌てて入ってくる春子

春子 申し訳ございません。遅刻してしまいました。

生徒、ざわざわ騒ぐ

先生 ああ、秋子さんのお父さん。保護者の方は後ろにお願いいたします。

春子 そうですね、オホホホ……じゃなかった。ゴホン分かっています。

先生 では気を取り直して、授業を始めます。号令。

生徒 起立。礼。着席。

秋子 痛いっ（椅子に画びようか何かが、あつた様子であわてて立ち上がる）

先生 うん?どうした?和泉。

生徒、くすくす笑う

秋子 べ、別に何でもありません。

先生 そうか、じゃあこの前の続きからやるぞ。教科書を開けて……えー、前回示したように……

の様子が変なことに気づく先生。

秋子 あれ？

先生 どうした、和泉さん？

教科書を探す秋子。机の中を見ている。

先生 教科書ないのか？

秋子 すいません……忘れました。

先生 なんだ、しょうがないな、こんな時に……。おい、誰か見せてやれ。

秋子、教科書を見せてもらおうと周りを見るが、みんな無視をしている。

生徒 私、和泉さんの教科書、ロッカーで見ました。

先生 そうか。和泉、取りに行つてこい。

秋子、立ち上がって取りに行く。

生徒、足を引っかけて秋子を転ばす。

生徒達笑う。

先生 おいおい、大丈夫か？

秋子、立ち上がりロッカーの教科書を見つける。

教科書がボロボロになっていて、立ちつくす秋子。

先生 どうした？早く座りなさい。

秋子 ……はい。

先生 よーし。では、環境についてだが……、生物は周りの様々な環境要因の影響を受けて生活しているってのは、前回やっただな？この環境要因のうち、ある一つの要因が不足したり、過剰であると生物の営みが、抑えられることがある。例えば、植物は、光が十分で適切な温度条件の下でも、水分が不足すると光合成量が減少する。この時の水分のように、生物の生活を抑制する環境要因を限定要因という。ここ、アインダーラインな。

先生が授業をしている間、秋子の後ろから、生徒が消しゴムのカスを投げている。

秋子周りを見るが、生徒達は知らん顔してやめる気配がない。

頭を抱える秋子

(みんなの心の声)

秋子 どうして、こんなことするの？

生徒A うざいんだよね。

生徒B 最初は同情してたけど、自分ばかり不幸を背負っている

みたいな顔してさ。

生徒C ムカつくんだよね。暗い顔ばかりで。

先生 和泉……お母さんが亡くなったのは分かるけど、先生の身にもなって欲しいよ。

生徒D だいたい、自分勝手なんだよ。

親A ああ、あの子、たしかお母さんを亡くした……

親B 気の毒ね。

親C 高校生にもなって、保護者参観なんて必要ないのに……もう、忙しいのにさ。

先生 今日はいろんな保護者が来てるからなあ。授業もきちんと

やりたいし、和泉のやつ、問題おこすなよ。

親D 最近の子どもは難しいんですよね。

親E すべて、学校に任せてますから……

親F 私も、家では、ほったらかしですよ。

秋子 もう、やめてよ。

急に立ち上がる、秋子

ざわつく教室

先生 和泉?! 一体、どうしたんだ。

秋子 うう……

先生、秋子に近づいて

先生 頼むよ、和泉。保護者の方も沢山、来てるんだからさあ。

春子 (生徒に向かって) ちょっと、あんた達いい加減にしなさいよ。さっきから見てたら何なのよ。大勢でよってたかって一人をいじめて、からかって、そんなに楽しいのかい!?

ざわつく教室

先生 ちょっと、和泉さん。

春子 (先生に向かって) 先生もだよ。どうしてもっと生徒に目を向けない。体裁ばかり気にしてたってしょうがないだろ。

クラスで何が起ってるかぐらい、分かるだろ! さっきの話じゃないけど、先生がこのクラスの限定要因じゃないの?

教室

ざわつく教室

生徒たち 何なのよこの人。

保護者たち いじめですってよ……

春子 (保護者に向かって) あんたらもだよ。あんたら、自分の

子どもはさぞ、いい子で自分たちには関係ないって顔して
んじやないよ。自分の子どもが何をしてるかもっと目を見
開いて見る！やっていいことと悪いことのしつけぐらい自
分でしろよ！

ざわつく教室

春子 でもね、一番悪いのは秋子、あんただよ。「私はいじめられ
ています。つらいんだよ。どうして誰も分かってくれないの？」
みたいな顔していつまでも殻に閉じこもってるんじゃないの？
そんなんだからみんなから、いじめられるのよ。もっと
強くなりなさい。世の中はね……、生きる事ってね……
もっともっとつらいんだよ。

秋子、教室を飛び出る

春子 ちよっと、待ちなさい秋子！

ざわつく教室

先生に言い寄る保護者達。

暗転

場面転換

#食卓

秋子 離してよ！

春子 いい加減にしなさい。秋子！

冬彦 お姉ちゃん！

夏子 お母さん！

秋子 いやよ、もう。教室であんな風にみんなに怒鳴って……

馬鹿みたい。もう、本当に学校に行けないじゃん。

春子 何を言ってるのよ。あんたが蒔いた種でしょ。戦うのよ。

現実をしっかりと見つめて、みんなと戦うの。そして自分に負
けないように強くなるのよ。

秋子 どうして、私だけがこんなにつらい目に遭わなくちゃいけ
ないの……

春子 秋子は一人じゃないのよ。家族で、家族みんなで、今を乗
り越えるのよ。

秋子 そんなこと出来ないよ。みんな、はれ物に触るみたいに私
に接して、お母さんがいなくなって、お父さんも……何も

言わないし……私、どうしていいかわかんないよ。

春子 秋子。

秋子 だいたい、お母さん勝手よ。自分は勝手にみんなを残して

死んじゃって……私だって、死にたいよ。

一郎 甘ったれるんじゃない！

春子が一郎に戻って、秋子を平手打ち

一郎 お母さんはな……死にたくて、死にたくて死んだんじゃないんだ。もっともっと生きてかかったんだ。もっともっと、お前達と一緒に笑っていたかったんだ。だから、お前に強く生きて欲しいって言うてるんだろ。どうして、どうしてそれが分からないんだ。

秋子 お、お父さん？

冬彦 お父さん？

夏子 お母さんじゃないの？

春子登場

春子 ごめんね。秋子、お母さん死んじゃって……。でもね、お母さん、ずうっとお前のこと、夏子、冬彦、そして、お父さんのことをちゃんと見てるからね。

秋子 お母さん。

春子 お母さんね、もっともっと生きていたかった。さつきは、「生きることはつらいんだ」って言ったけどね……。秋子、生きてるって事は本当に素晴らしいことなんだよ。お母さん、死んでるからそれが本当に分かるよ。だから、秋子。これからも家族みんな笑って暮らしてね。きつと、クラスのみん

なも元気な秋子を見たら、変わってくれるよ。ね、秋子。

秋子 お母さん。(春子に抱きつく)

夏子 秋子……。

一郎 お父さんもな、これからはお前にもっと強く、いろんな事を言うぞ。お母さんを入れ替わって、初めて分かったんだ。本当に逃げてたのは秋子じゃなくて、お父さんだって事を。だから、秋子、一緒に現実と向き合おう。

秋子 お父さん。

一郎 叩いて悪かったな……そ、そうだ、お父さんの目を覚ます意味で、秋子、お前もお父さんをぶつてくれ。

夏子 何を言ってるのよ。

冬彦 お父さん。

一郎 さあ、秋子。

春子 ああ、言ってるんだからぶつてやったら。

秋子、一郎を叩く

冬彦 本当にぶった。

そして、抱き合う。二人。

一郎 秋子、お父さんも逃げないよ。だからな、お前も、逃げるんじゃないぞ。

秋子 お父さん。ありがとう。

春子 さあ、そろそろ私は行かなくちゃね。

冬彦 え？もう、行っちゃうの？

春子 このままだったら、浮遊霊になりそうだからね。

夏子 お母さん、いろいろありがとう。

春子 夏子も、きちんとお父さんに報告しないとね。

一郎 ？

夏子 分かっている。じゃあね、お母さん。

冬彦 お母さん。また、遊びに来てよね。

春子 そうだね。暇が出来たら遊びに来るよ。

冬彦 死んでるから、暇なんじゃないの？

春子 あっ言ったな。いろいろ忙しいんだよ、あっちでも。冬彦、

サッカー頑張るんだよ。

冬彦 うん。

一郎 春子……（ぐすん）

春子 お父さん、しっかりしてくださいよ。和泉家の屋台骨なんだから。

一郎 わ、分かっているよ。

春子 それと、駅前のスナックのアケミちゃんにあんまりちよつかいをかけるんじゃないよ。

一郎 お、お前、何も今言う事じゃないだろ。

春子 あの子、嫌がってたよ。

一郎 えーっそうなの？

冬彦 はははは。

秋子 お母さん……ありがとう。

春子 お母さん、ずっとあんた達を見てるからね。

秋子 うん。……また、逢えるよね。

春子 逢えるよ。お前達がお母さんのこと忘れなければ……

秋子 忘れないよ、私。忘れるわけじゃない。お母さんは私の、私たちの大切なお母さんだから。

冬彦 フレーフレー秋姉、頑張れ頑張れ夏姉。フレーフレーお母

さん、頑張れ頑張れ、お父さん。

みんな フレーフレー冬彦。

一郎 冬彦！

一郎、冬彦を抱きしめる

寄り添う家族四人

春子 やっぱり、和泉家はこうでなくっちゃね。

夏子 ありがとうお母さん。

秋子 ありがとう。

冬彦 ありがとう。

一郎 春子、ありがとう。

春子 ありがとう……じゃあ、みんな頑張るんだよ。

秋子 はい。

夏子 はい。

冬彦 うん。

一郎 おう。

春子 いい返事だね。じゃあまたね。

春子消える。

暗転

#食卓（はじまりの朝）

夏子登場

夏子 やばーい、また寝坊しちゃった。秋子、冬彦、早く仕度し

なさい。

一郎 おー夏子。おはよう。

夏子 あれ、お父さん、どうしたのその格好。

一郎 見れば、分かるだろう。朝ご飯作ってるんだよ。

夏子 それは、わかるけど……大丈夫なの？

一郎 今度は、カラスとマヨネーズをちゃんと確認したからな。

大丈夫だ。

夏子 そ、そう。

秋子、冬彦登場

冬彦 秋子姉ちゃんのせいだからな。

秋子 あんたが忘れるのが悪いんじゃない。

夏子 何なのよ、朝から騒々しいなあ。

冬彦 秋子姉ちゃんが、昨日のゲームのデータをセーブしてないんだよ。

夏子 ええ？

秋子 冬彦がしたって言ったから、電源切ったんじゃない。

冬彦 そんなこと言っていないよ。

夏子 遅くまで、ごそごそしてると思ったら、ゲームだったの？あきれた。

冬彦 （テーブルを見て）うわー、すっげえー。うまそうじゃん。

秋子 なになに？これ、お父さんが作ったの？

夏子 らしいわよ。

秋子 やれば出来るのね。

一郎 なんだ、その言い方は。

冬彦 みそ汁もおいしいよ。

一郎 そうだろ、そうだろ。昨日お母さんのお料理レシピを発見してな、それ見て作ったから、間違いないはずだ。

秋子 なーんだ。お母さんのおかげか。

一郎　こらこら、でも作ったのはお父さんなんだから。少しは認めるよ。

秋子　はいはい。

夏子　ほら、早くしないと遅刻しちゃうわよ。秋子、ご飯をみんなによそって。

秋子　はい。

冬彦　お姉ちゃん、僕大盛り。

秋子　食いしん坊。

冬彦　何だよ。いいだろ。育ち盛りなんだから。

一郎　みんな行き渡ったか？よし、食べよう。

みんな　いただきまーす。

爆発音、その後に電子レンジのチンの音

キッチンの方から煙

みんな　???

秋子　何今の？

夏子　さ、さあ？

冬彦　台所の方からだったよ。

秋子　電子レンジの音もしたよね？

夏子　お父さん？何やったの？

一郎　いや、ただお父さんは、生卵を目玉焼きにしようと思っ
て……そのままチンって。

夏子　えーっ！

秋子　ラップもかけずに？

冬彦　それって、時限爆弾作ったみたいだね。

台所に走るみんな

台所の奥から

夏子　何ーこれ？

秋子　いやだ。お父さんレンジがすごいことになってるよ。

一郎　うわ、こりやひどい。

冬彦　やっぱり、お父さんだね。

夏子　お父さん！

一郎　すまん。

春子の写真立てが倒れる

一郎　そんな、母さんまで（写真立てを手取る）トホホ

秋子　（写真立てを奪って）うわーん、お母さん。やっぱり帰って
きてよー。

音楽

幕

